

特集「ボランティアと教育」について

山口 一 史

(ひょうご・まち・くらし研究所)

今号の特集テーマは「教育とボランティア」だ。昨年の学会総会でアンケートをお願いし、最も票数の多かったのがこのテーマだったので、早速採用させていただいた。

驚いたことに特集以外の一般投稿論文もこの教育とボランティアに関連する内容のものがずらりと並んだ。やはり関心の高いテーマであることがよく分かった。

折しも「教育」はいま最もホットな課題のひとつになっている。教育基本法改正、教育再生会議の設置、子どものいじめ問題、子を殺す親と親を殺す子—など、大変なことになってきている。おまけに教育を含む政治課題のタウンミーティングの"やらせ"問題までが表面化した。もちろん学会のみなさんはそんな「はやり」に影響されたのではなく、ボランティアは教育のどこかと深くかかわっている、あるいはボランティアのどこかは教育とかかわりがある。また反対にかかわってはいけなないと考えているからだろうか。いずれも熱気あふれる論文がそろった。

教育とボランティアでは、公教育の中でのボランティア（活動）の位置づけがクローズアップされつつある。公教育とボランティアの関係について、巻頭の池田論文が極めて詳細に流れを示している。教育の骨組み自体が揺れる中で、比較的近年に組み入れられて来たボランティアの扱いもまた揺れ動いていたという。先の教育再生会議の第1次中間報告（2006年12月21日）はボランティアに関して「長期集団宿泊体験、奉仕活動、ボランティア体験、職業体験等について」という言葉で"頭だし"している。ボランティアは公教育のテーマであるのかどうか、といった根幹の議論もあるだろう。事実、ボランティアは自主性、自立性こそが重要なのであって、それを学校で教えるのはおかしいという意見があれば、一方にボランティアであろうが何であろうがまずはどこかで教えなければ始まらないとする考えもある。そうした視点からも今回の特集テーマは今日的であるわけだ。

教育とボランティアは広義の社会教育の中でも活発に展開している。

神戸市内にこんな事例がある。主として在日の高齢者を対象に日本語の読み書きの獲得をめざしている「識字教室・ひまわりの会」という活動がある。

山口 一史

文字が読めないために役所に行って申請や届けができない、おっくうになる。食堂に入ってもメニューが分からない。買い物も同じだ。神戸には以前から夜間中学があってさまざまな事情から教育の機会を得られなかった人たちが学んでいる。ところが日本語が読めないとそこに通っても肝心の教科書が読めない。

夜間中学の教師だった女性とボランティアが中心となってこの識字教室を運営し、手づくりのテキストで高齢の「生徒」にゆっくりと丁寧に文字を知る面白さを伝えている。常時、15人前後の人たちがなれぬ手に鉛筆を握っている。

実はこの識字教室は、阪神・淡路大震災の直後に被災地支援に入ったSVA（シャンティ国際ボランティア会、当時は曹洞宗ボランティア会）が神戸に伝えたものなのだ。緊急時の救援活動が一段落した後、文字の読めない人がいることに気づいたSVAは、東南アジアで行ってきた識字教室を神戸で開いてはどうかと持ちかけ、スタートアップを応援した。いわばボランティアテーマと手法の「技術移転」が同じ国内で行われたのだ。

長年、ひまわりの会に通っているある女性はこんな短文を書いている。

「わたしはきっぷがないからでんしゃにのるときはまよいよったけど、このあいだえいがいってかんばんみたら しんながた 200 えんとかいてあったからうれしかった。勉強したおかげです」

地域の祭礼や伝統的な行事への子どもの参加を手ほどきする大人、少年野球の監督やコーチ、地域子ども合唱団の指導、登下校・園時に通学路で立ち番をする—こうした役割は通過儀礼的であったり、スポーツや文化の一環としてみられたり、防犯の色彩が強められたりして分かりにくくなっているが、子どもの社会参加を支援する社会教育分野でのボランティア活動でもある。先日も親が日本に仕事に来ている日系ブラジル人の子どもにポルトガル語と日本語を伝えている若いボランティアの話聞いた。資金難で事務所も維持できないかもしれないと悩んでいた。

この学会誌の諸論文や報告が、さまざまな分野で活動している現場のボランティアを力づけ、励ます作用を生み出すよう期待したい。